

かながわにおける縄文から弥生 ～土器はどのように変わったのか～

谷口 肇

(神奈川県教育委員会文化遺産課)

■ 今回のお話のポイント

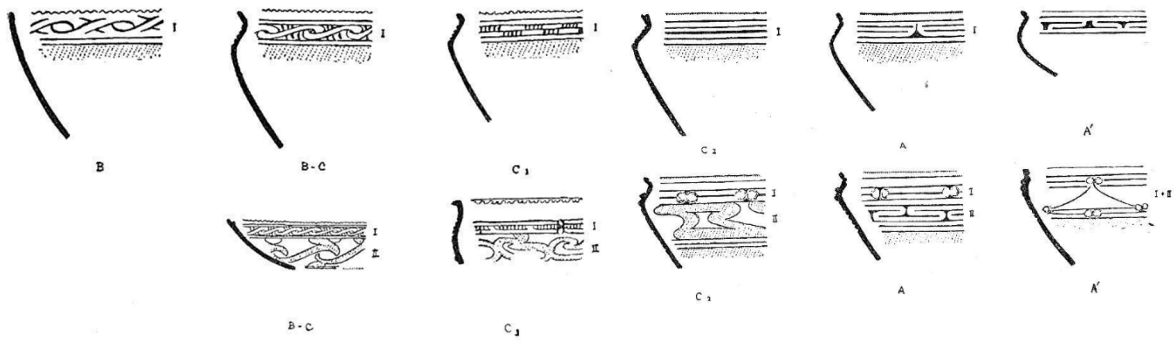
- 考古学研究者は、妙に「土器」「うつわ」にこだわる、なぜ？
- 縄文時代終末の土器の様相とは？
- 「かながわ」(神奈川県の地理的範囲の意味)の縄文時代が終わる頃の土器と弥生時代が始まる頃の土器とは、何がどのように変わるのか？
- 実際、かながわの初期の弥生土器は(見た目からして)奇々怪々
- その土器の変化が示す、当時の社会や文化の変容、移り変わりの実態とは？

はじめに～考古学における「土器」「うつわ」研究の必要性

- 我が国に土器作りが発生した縄文時代以降、土器や陶磁器などの主に食器、調理具や貯蔵具などの身近な「うつわ」は、「壊れやすく、すぐに作り直せる消耗品」(特に素焼きの土器)でもあるため、比較的短い期間で変化を重ねていく。その変遷は、特に先史時代(縄文～弥生時代)の土器においては、一定の期間・地域毎にまとまった特徴を有す場合があります、考古学では、それぞれの土器の「時空的なまとまり」を「型式」と呼ぶ。
- 「暦」の明らかでない先史時代の時期変遷の「物差し」は、土器の「型式」の変遷(「編年」という)であり、研究者は、先史文化をより細かい単位の「物差し」で把握するべく、戦前より土器型式の細別の追求に熱心に取り組んでいる。
- 特に縄文時代終末と弥生時代初頭の土器型式の変化を追求することは、「狩猟採集文化」の縄文時代から「農耕文化」の弥生時代への転換という日本史上の「一大事」の具体をより細かな時間的「物差し」で追及することにほかならない。

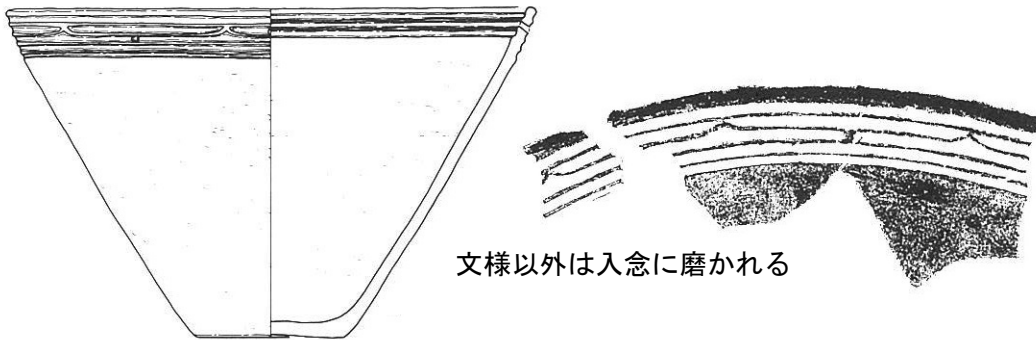
1 縄文時代終末頃の土器の様相

- 一万年以上に渡って続いた縄文土器は、大きく草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6時期に大別され、単純な器形・装飾に始まり、多様な器形・複雑な装飾から装飾の洗練化と変遷。
→ 教科書的「縄文土器」のイメージである「ダイナミックな形状に複雑な装飾」は、主に中部～関東地方の中期の土器のこと。
- 縄文時代晩期(最新の科学的年代測定によると、紀元前1300年頃～紀元前500年頃)には、東日本(およそ中部以東)には、彫刻的な文様が施され、入念に磨かれた精製土器(浅鉢など)と縄文のみや無文の煮炊きに使用された粗製土器(深鉢主体)から構成される土器型式が分布、東北地方では「亀ヶ岡式土器」(青森県亀ヶ岡遺跡が標式)と呼ぶ(精緻な文様が特徴)。

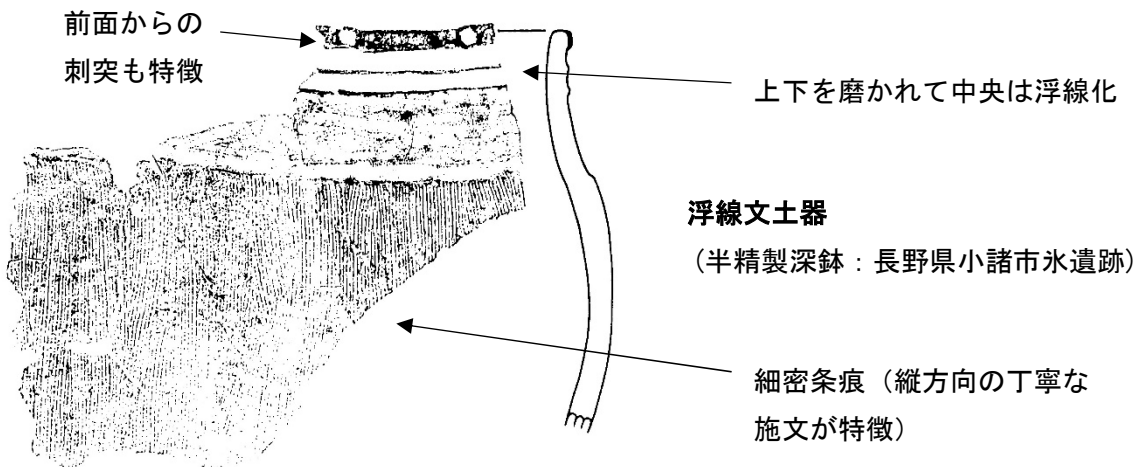


山内清男『日本遠古の文化』における縄文晩期亀ヶ岡式土器の細分模式図

【左側（晩期初頭）から右側(晩期末)へ変遷・右端が「変形工字文」】

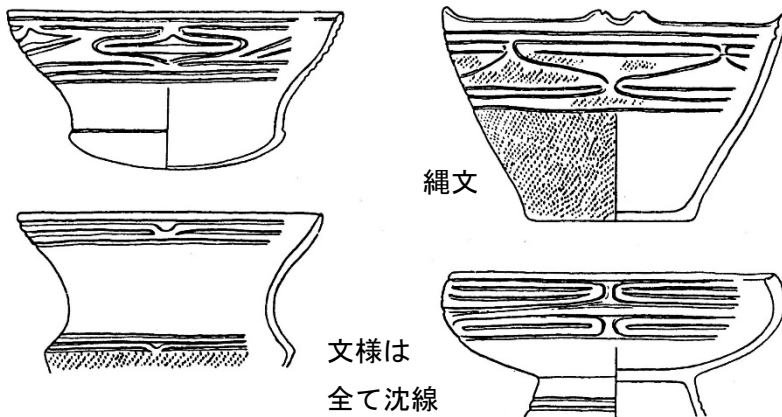


浮線文土器(鉢：秦野市中里遺跡) ※亀ヶ岡式編年では最後から2番目に相当



浮線文土器

(半精製深鉢：長野県小諸市氷遺跡)



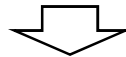
縄文

変形工字文土器(宮城県)

(縄文晩期終末～
弥生初期)

文様は
全て沈線

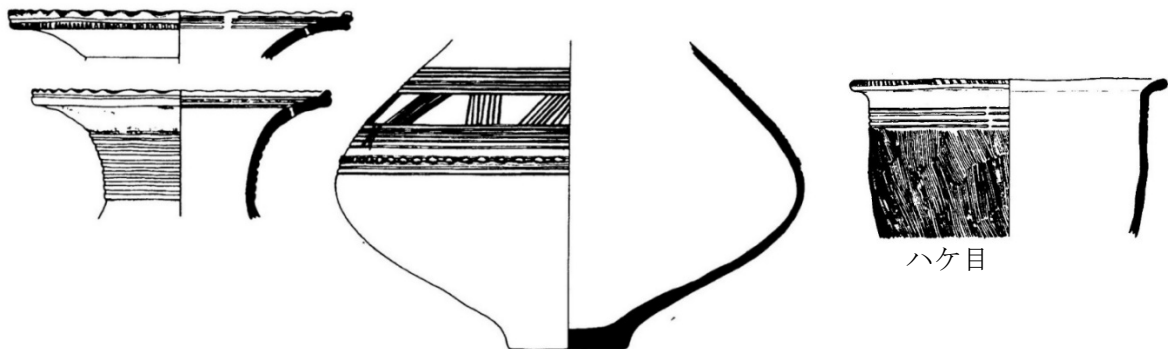
- 特に縄文時代晩期終末の中部～関東～東北南部(福島県域)には、亀ヶ岡式土器の地方類型として、周囲を削り込んで浮き立たせた「凸部」で文様のモチーフを特に彫刻的に表現する「**浮線文土器**」が展開。中部（～関東西部）の浮線文土器の粗製土器は、細かく密接な条痕（**細密条痕**）が特徴。
- 東北地方には、亀ヶ岡式土器の最終段階として、文様のモチーフが沈線化し、「工」の字を入り組ませたような「**変形工字文**」が発達（一部は東関東に伝播）。
 - 亀ヶ岡式土器や浮線文土器の器種は、煮炊きに使う大量の深鉢に食器としての浅鉢、それに少数の壺等から構成。
- かたや西日本には、文様に乏しい精製土器(浅鉢主体は同じ)と口縁部に突帯を巡らせる粗製土器(外面は無文など)から構成される土器型式が広く分布、「突帯文土器」と呼ばれる。
 - 器種の構成は、亀ヶ岡式土器などと同じ「縄文土器」の特徴。
- 西日本縄文文化の東端にあたる伊勢湾周辺には、外面を二枚貝（アカガイ・ハイガイ・サルボウなど）のギザギザの縁などで擦ったことによる粗い筋状の「条痕」で覆った「**条痕文土器**」が「突帯文土器」の変種として独自に発達。



■ 以上の「浮線文土器」「変形工字文土器」「条痕文土器」がかながわをはじめとした関東の初期弥生土器の形成に大きな影響を与える。

3 弥生時代が始まる頃の土器(弥生早期～前期)

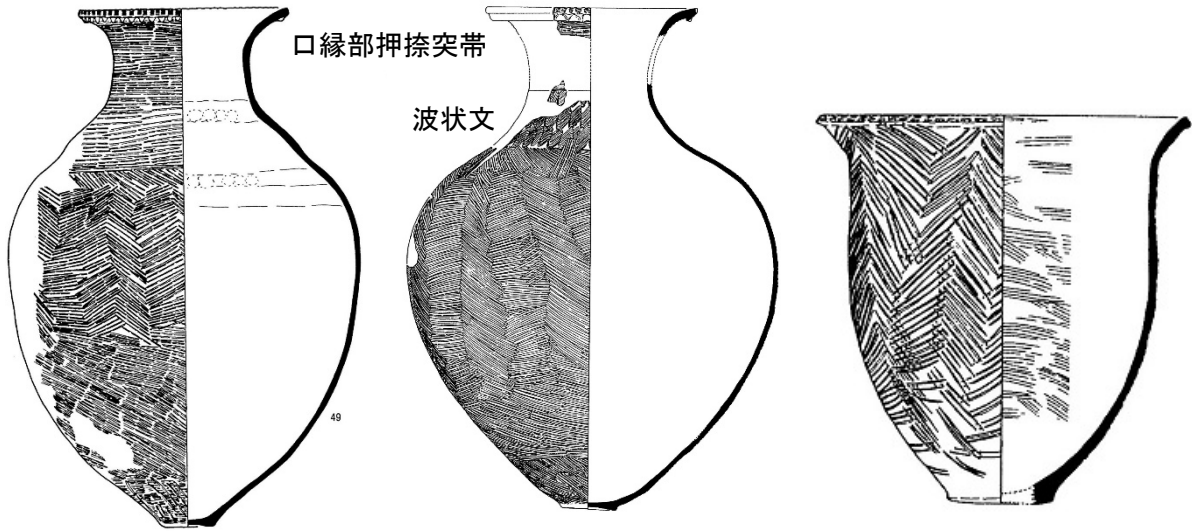
- 西日本の西端、北部九州では、紀元前 900 年前後に稲作農耕が大陸より伝播して以降、縄文土器的な器種構成や器形に変化が生じる。(弥生早期)
 - **壺の割合が増加**(浅鉢の減少)、稲粃などを貯蔵し、運搬する道具として発達
 - 煮炊用の土器が口縁部が直立する深鉢形から**口縁部が外反する甕形に変化**
- その後(紀元前 700 年代)、**壺と甕が主要器種となる「弥生土器」の確立**
 - 西日本全体に「**遠賀川式土器**」(弥生前期土器の代名詞)が分布
 - 器面の「ハケ目」調整(木口で器面をならした細かい筋状痕)が一般化
- 伊勢湾岸に達した遠賀川式土器の影響で在地の条痕文土器が変化(弥生化)
 - 突帯を持つ条痕深鉢が壺(大型品あり)に変容(「**変容壺**」と呼ばれる)
 - 突帯を持たない条痕深鉢が甕に変容



伊勢湾の弥生前期遠賀川式土器(三重県納所遺跡・壺は相模地域に搬入)

※ 東海系条痕文土器の独自要素

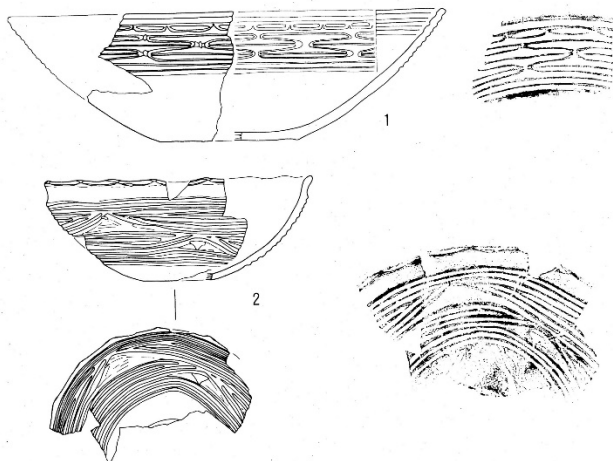
- ・ 外面調整の条痕が「縦位羽状」という文様を意識したものに变化
 - ・ 若干遅れて、壺の肩部文様に波状文が発生（近畿より早い）
- 口縁部突帯と上記2要素は、東日本の初期弥生土器の形成に大きな影響



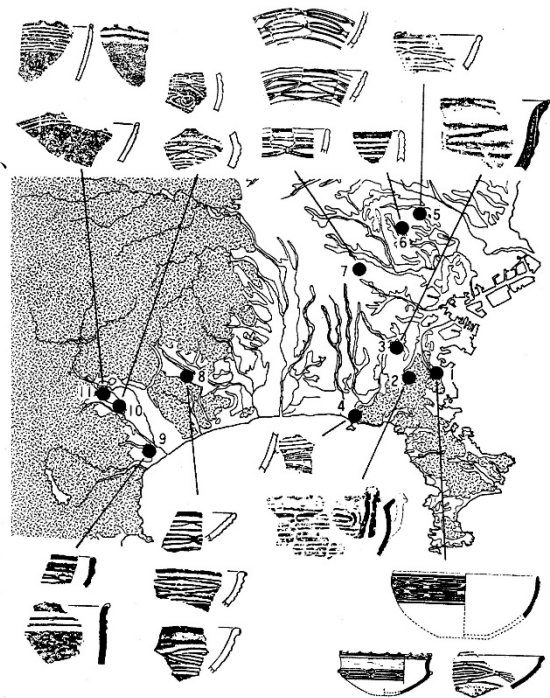
東海系条痕文土器(弥生前期「水神平式」：豊川市麻生田大橋遺跡)

3 かながわの縄文終末期の土器（西日本の弥生前期の前半まで？）

- 今から 2500 年ほど前、およそ紀元前 600～500 年前後、縄文時代晩期終末の
かながわには、上記のように「浮線文土器」が分布。
- 構成は、彫刻的な浮線文が施され、入念に磨かれた精製土器(主に浅鉢・鉢)と
細密条痕や撚糸文が施され、煮炊きに使用された粗製の深鉢のセット。
- 実は、浮線文土器後半～終末期には、アワ・キビといった雑穀栽培が稲作に先
立って伝播している（土器に圧痕あり）。
→ ただし、この段階では、土器の構成
は変わらず、縄文土器の姿を保持。
- 秦野市平沢同明遺跡、小田原市諏訪の前遺跡、
南足柄市内山尾尻遺跡、横浜市杉田遺跡、
横浜市西之原遺跡など



平沢同明遺跡の浮線文土器（上が古、下が新）

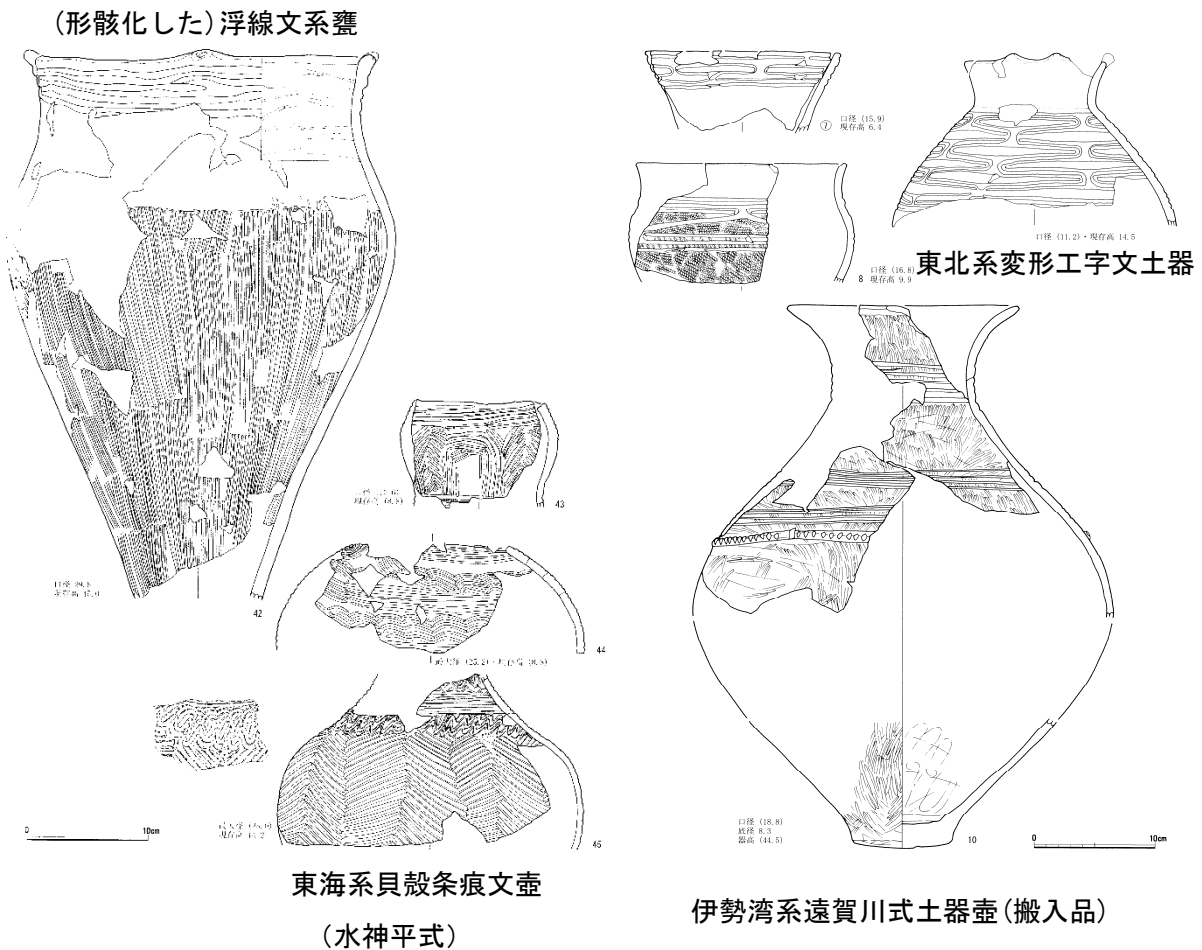


(1 杉田, 2 柱台, 3 松原越, 4 大源太, 5 上作延南原, 6 オオデラ
7 西之原, 8 平沢, 9 諏訪の前, 10 怒田上原, 11 内山尾尻)

かながわの浮線文土器の遺跡(谷口 1991 より)

4 かながわの初期の弥生土器(西日本でいう弥生前期の後半)

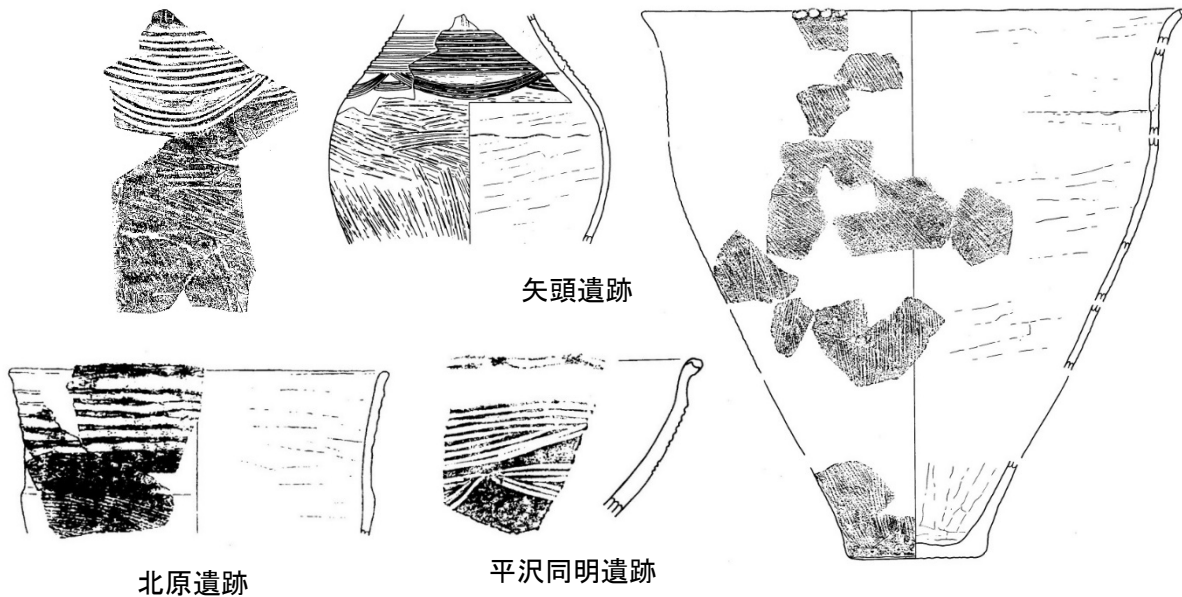
- 紀元前 500～400 年頃、西日本に広まった弥生文化が東海地方を經由して、かながわへも影響を及ぼしてくる。
- 「光は西から」、それではかながわの初期弥生土器は、西方からやってきた東海系の粗い条痕文土器に塗り替えられたのか？
- 実際は、東海系条痕文土器だけではなく、細密条痕文を含む在地の浮線文系の土器、なぜか東北系の変形工字文土器など、隣接・遠近含めた各方面の本来は異なる系統の土器文化の影響が複雑に入り組む状況がかながわの地に突如として現出する。どのような社会的背景でこうなるのか？
- 東海系はまだしも、なぜ東北系がまるで示し合わせたように南下してくるのか、現状では未解明
- 全体としては、壺と甕のセットがメインという西日本弥生土器と同様の構成に変化していく。



平沢同明遺跡出土土器に見る弥生前期段階の各系統

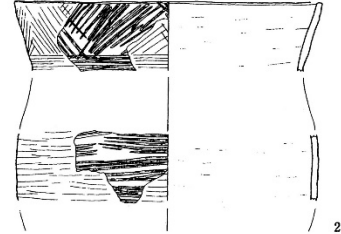
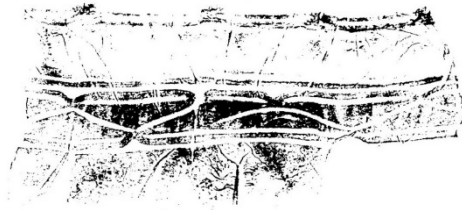
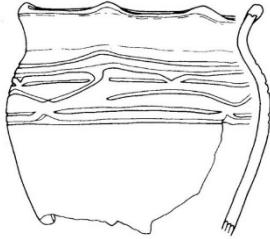
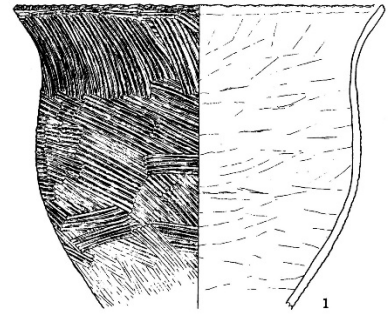
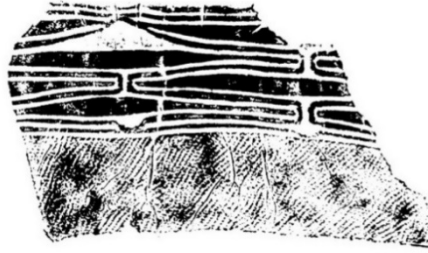
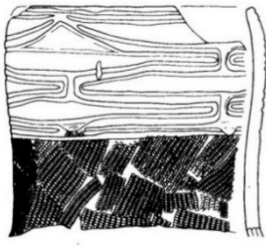
5 かながわの初期の弥生土器の変遷（弥生前期後半～中期初頭）

- 当初（弥生前期後半の前半）は、地元浮線文系統の土器（鉢・深鉢・甕）に東海系貝殻条痕文土器の大型壺、変形工字文系の土器（鉢、甕）が加わる構成になるが、個々の系統の融合は顕著でない。なお、この段階、雑穀に加えて、コメが確実に伝播（圧痕・炭化米）。
- 在地浮線文土器の要素が変形・形骸化
 - ・ 浮線文のモチーフが沈線化(施文技法の簡略化)、彫刻的技法の手抜き？
 - 変形工字文土器の影響？
 - ・ 特に口縁部外面の平行浮線文の磨きが省略され、平行する**太描沈線文**に変化
 - ・ 細密条痕文が細いまま、「密」ではなく**雑に施文**
 - 全体に丁寧さ、入念さに欠けてくる



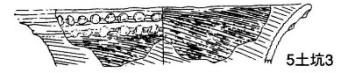
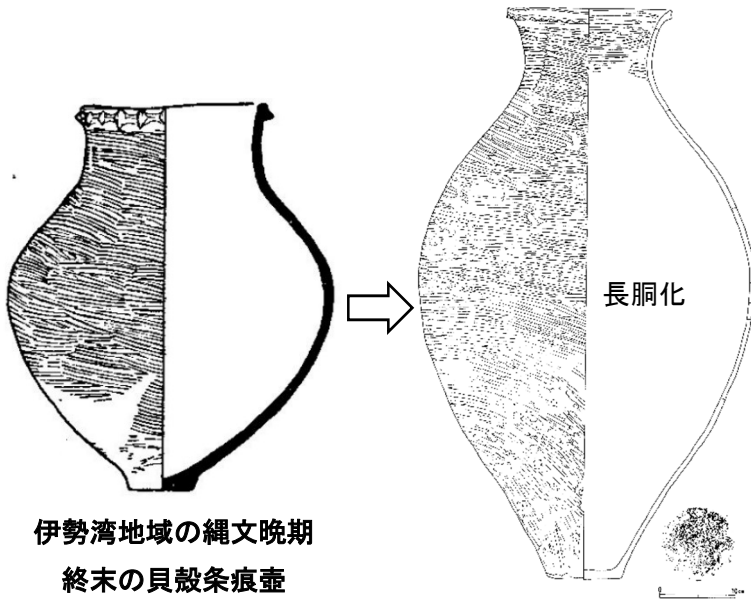
浮線文土器が変形・形骸化した資料

- 浮線文土器に本来見られなかった要素が新たに加わる
 - ・ 特に**大型の壺**
 - 東海系の貝殻条痕壺の搬入(一部伊勢湾系「遠賀川式土器」壺もあり)
 - 稲粃等の運搬容器？(西方弥生文化のメッセンジャー？壺だけで甕はない)
 - ・ 貝殻条痕を模倣した**粗い条痕文**（しばしば「縦位羽状」モチーフ）
 - 上記貝殻条痕壺の模倣、在地化（長胴化、「再葬墓」に使用？）
 - ・ **変形工字文**などの非在地系沈線文
 - 東北、東関東から伝播、文様結節部の独特の「**抉り**」が特徴
 - ・ ただし、本来シンメトリーであった文様構成がしばしば崩れ、**不連続で非対称な文様**も発生
 - 縄文晩期「亀ヶ岡式」の約束事が形骸化
 - ・ **大粒の縄文**(実は浮線文土器段階に技法としての「縄文」は乏しい)
 - これも変形工字文とともに東北方面から伝播した可能性が強い。
- 大井町矢頭遺跡、茅ヶ崎市石神遺跡、清川村北原遺跡、小田原市前川山王前遺跡、大井町中屋敷遺跡、横浜市境木遺跡、秦野市平沢同明遺跡、厚木市及川宮ノ西遺跡

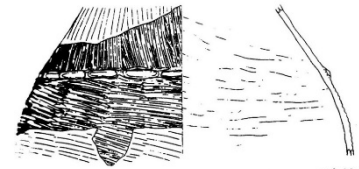


平沢同明遺跡 (変形した変形工字文)

上村遺跡 (在地模倣条痕壺)



(貝殻条痕)



中屋敷遺跡 (在地模倣条痕壺)

伊勢湾地域の縄文晩期
終末の貝殻条痕壺
(浮線文土器平行期)

及川宮ノ西遺跡
(在地模倣条痕壺)

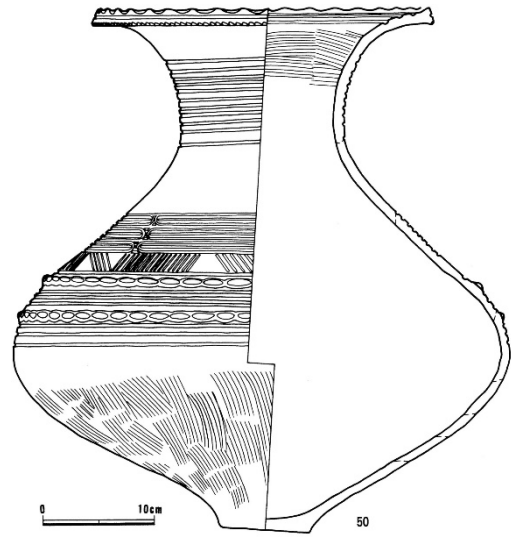


中屋敷遺跡出土炭化米

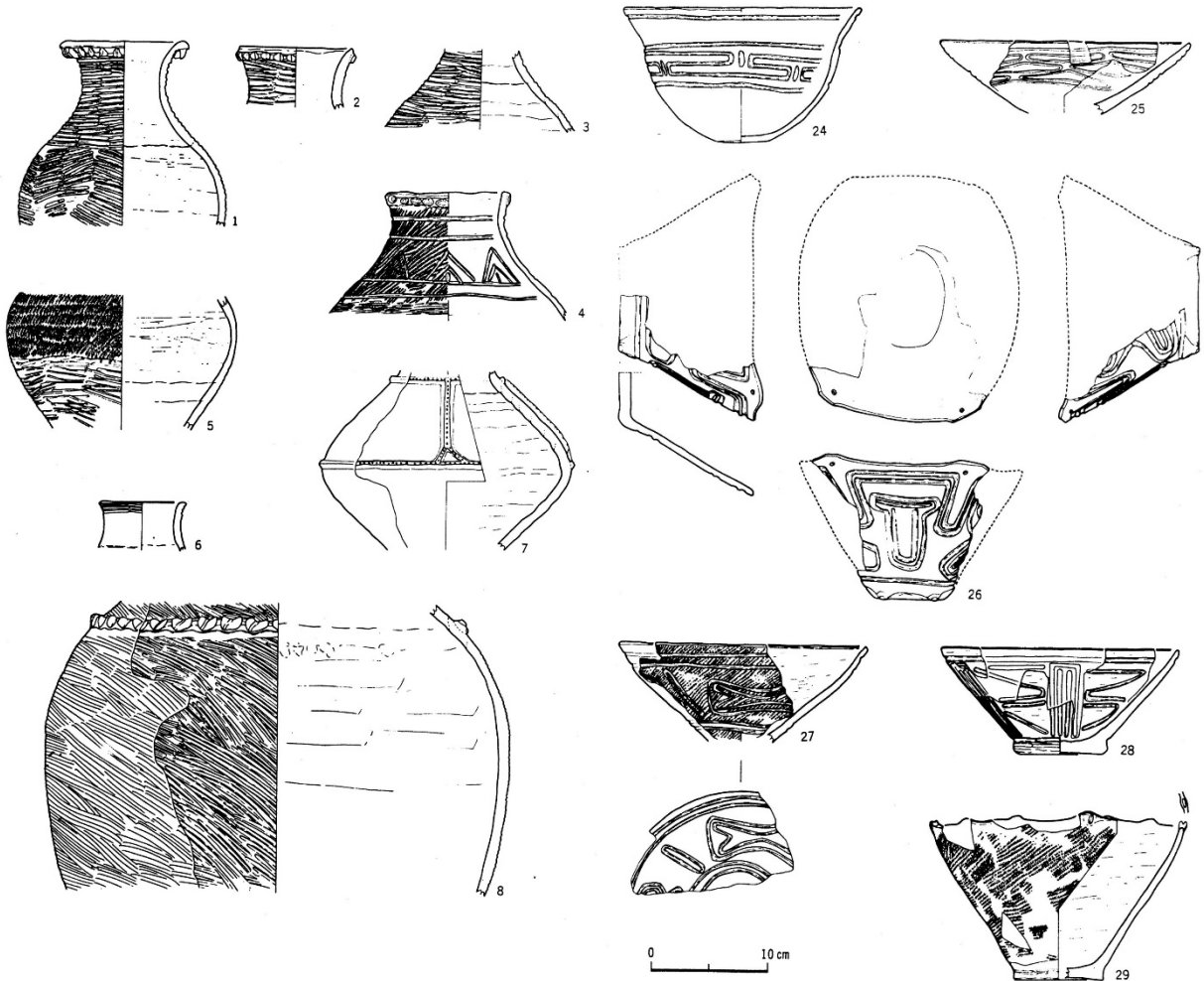
- 次の段階 (弥生前期後半の後半～前期末) には、上記の異系統の要素が一つの土器に混じり合ってくる。
 - ・ 同じ土器の上半部に變形工字文、下半部に浮線文土器の細密系条痕文や東海系の粗い条痕文
 - ・ 東海系条痕文の口縁部で肩部に變形工字文
 - ・ 原体は東海系(貝殻)なのに施文方向が浮線文系 (などなど複雑怪奇)
- 前段階に見られた太描の沈線が平行線だけでなく、文様モチーフの描画に採用
 - ・ これ以降、「太描沈線」は、かながわの初期弥生土器の大きな特徴になる
- 器形的には、煮炊き用の器種では、深鉢形が激減し、口縁部が開く甕形メインになる。浅鉢も減少するなど、縄文的器形が衰える。
- 同時期の東海系貝殻条痕文土器・伊勢湾系遠賀川式土器の搬入
- 山北町堂山遺跡、清川村上村遺跡、秦野市平沢同明遺跡、逗子市池子遺跡など



池子遺跡（伊勢湾沿岸弥生前期末
「水神平式」の搬入品）



平沢同明遺跡（伊勢地方の弥生前期末
遠賀川式の搬入品）



堂山遺跡（条痕文・縄文・沈線文の融合、沈線の太描化）

.....ここまでが弥生前期.....

- 弥生中期初頭には、各系統の混合現象がさらに顕著になる一方、近畿地方の櫛描文土器（数本単位の櫛状の工具で直線文や波状文を描く、複数の帯状の文様が上下に重なる）の影響を受けた東海地方の新たな(貝殻)条痕文土器の影響を受けて、特に壺の文様が帯状に多段化する。
- 深鉢の器形は消滅し、甕形ばかりになる。
- 沈線紋は、ほぼ「太描」化。
- 変形工字文は、さらに崩れて三角文・菱形文になる場合もある。
- 東海系貝殻条痕文土器は、駿河系の壺が急増する。
- 山北町堂山遺跡、南足柄市怒田上原遺跡、南足柄市内山尾尻遺跡、相模原市(旧相模湖町)鼠坂遺跡、相模原市(旧津久井町)中野大沢遺跡、相模原市(旧津久井町)三ヶ木遺跡、平塚市遠藤原遺跡、逗子市池子遺跡など
- ※ さらに新しくなると多段化した文様のそれぞれに本来異系統の文様が組み合わさるようになる（中期中葉）。



三ヶ木遺跡（変形工字文の三角文化・不連続化、小型壺の文様多段化）

中野大沢遺跡（中期初頭東海系貝殻条痕壺）

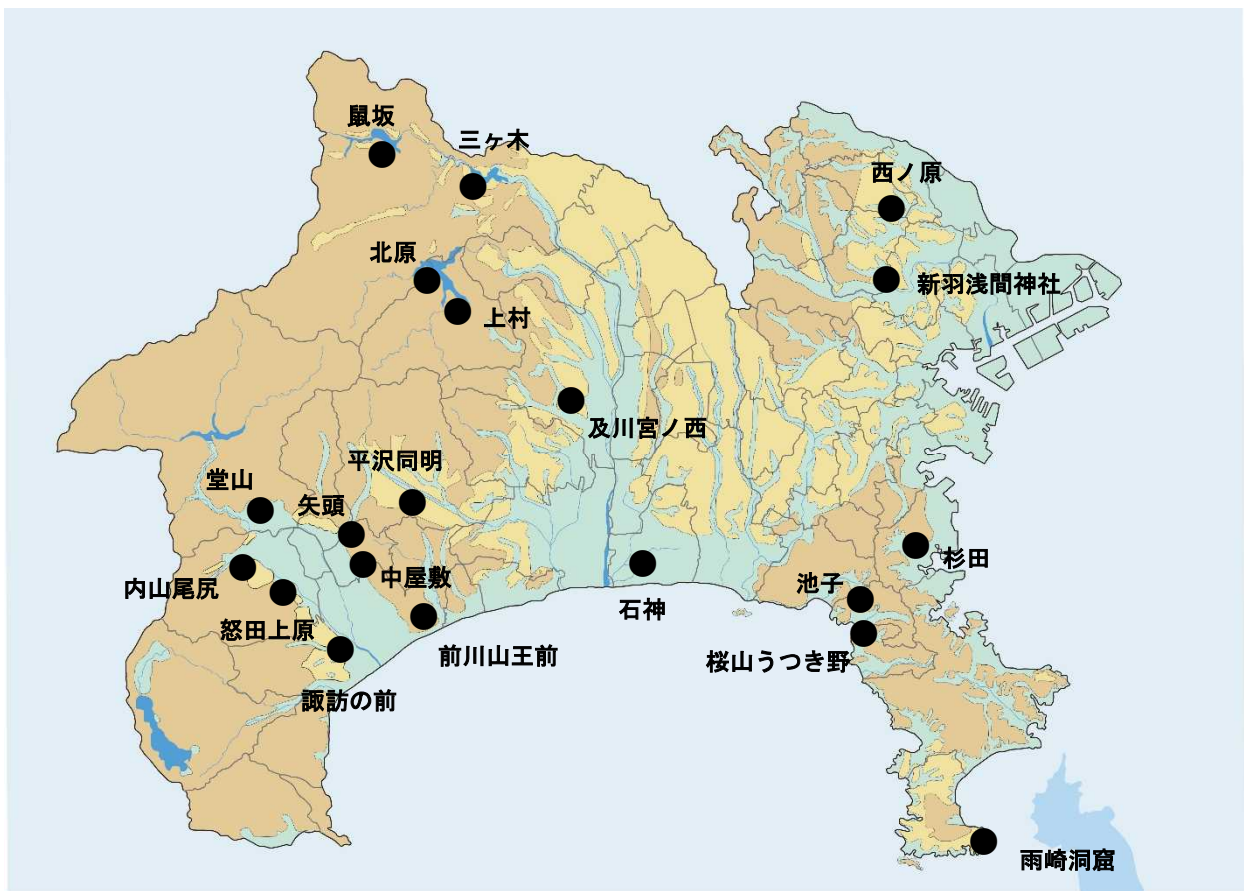
平沢同明遺跡（駿河系中期前葉条痕壺の搬入、多系統融合の大型壺）

7 かながわ初期弥生土器の変遷は、何を意味するのか

- 地元プラス複数の地域の系統が突如混ざり合う現象。
 - ・ 特に東海系条痕文土器の影響が濃く、雑穀に加えて、コメも確実に入ってくる。伊勢湾から遠賀川式土器も運ばれてくる。
 - これをもって、かながわも弥生時代に移行したとみなしてもよいか？
 - ・ ただし、同時に逆方向から変形工字文系土器も強力に影響
 - ・ そもそも地元の系統も消滅したわけではなく、しぶとく生き残る
 - 最大の問題は、拠点的な平沢同明遺跡を例外として、多くの遺跡の規模が小さいまま分散的に分布し、住居の様相も明確でなく、農耕を受け入れた割には不安定な社会が継続？
 - 人が来ていたとしても人口増には直結しない程度？
 - ・ 一方で、土器だけが交易品として持ち込まれ、人そのものが来なかったとしても、なぜ持ち込まれた「よその土器」を地元で模倣する必要があるのか。
 - 西の先進文化の伝播という単純な図式では理解できない、複雑な人間の動き、土器作りに対する我々の感覚とは異なる考え方が存在した可能性。
 - ・ 「よその土器」作りをなぜか容易に受け入れる、不思議とも言える許容力
 - 持ち込まれた「よその土器」をすぐに「手本」にする独特の土器作り
 - 「よそ」からの土器に食糧が入っていたとすると、不安定な小規模集団だけにそのような土器を大切にすあまり、ありがたがって？模倣すらする？ようになるなど、特別な(宗教的?)意識を持つようになったのか？
 - 模倣することで土器搬出元の(恩義がある)集団をリスペクトする？
 - 小規模集団の不安定さが不安定な土器様相に反映？
- 土器の見た目をひたすら真似する一方で、施文の簡略化、不連続・非対称施文など、厳密でなくてもよい、「ヘタ」「描き損じ」でも問題とされない状況
 - ・ 見た目は縄文晩期の土器に似ているが、土器作りの精神的な部分ではかなり異なっている。
 - 土器製作に手間暇をかける縄文土器(特に亀ヶ岡式)的土器作りの精神が薄れてくる？土器作りの約束事の厳密さが緩んでくる？
 - 土器作りの環境が縄文晩期ほどの緊張感がない？
 - 変形工字文など縄文晩期の系譜下の文様が見られるが、実は文様・施文の深い意味までは継承していないのでは？
 - 「縄文」のようで「縄文」ではない？
 - 一方で、貝殻条痕の模倣の場合、二枚貝という施文道具(「原体」という)を入手できなかったか、わからなかったため、とにかく荒々しい外見を真似しようとして、茎か枝を束にしたような適当な原体を使用(見た目重視)。
- 生活の中で土器作りにかかるエネルギーの相対的な低下
 - ・ 農耕導入に伴い、農耕に関係するルーチン作業が土器作りより優先？
 - ・ 仮に縄文晩期系の文様等に何がしかの「まじない」的意味があったとしても農耕生活がメインになる中で、「こだわり」が薄れてくる？
 - ・ 実は石棒や独鈷石など縄文晩期に通有の呪術的な石器も急減

■ まとめ

- 研究者によっては、かながわ（を含む東日本）における弥生前期～中期初頭の「弥生文化」を西日本の典型的「稲作農耕文化」と異なるものとして認めない意見も多い。確かに大規模水田経営などは中期中葉まで見られない。
- しかし、土器様相の変化を子細に検討すると、一見縄文時代晩期に類似する土器でも弥生前期段階から性格が異なってくるのがわかる。伝統的な縄文的土器作りから逸脱している。
- この変化の主な要因は、おそらく新来の農耕（に伴う様々な風習）であると思われるが、在地色やさらに北方の影響も窺えるなど、「典型」とは異なる独特の農耕に生活基盤を置いた文化がかながわに存在したと言えるのではないか。



神奈川県内の主な
縄文晩期終末～弥生時代初頭の遺跡

参考文献

(報告書・論文)

- 大倉 潤 2006「神奈川県秦野市平沢遺跡 9301 地点出土資料の検討Ⅱ—縄文時代晩期後葉から弥生時代初頭を中心に—」『研究紀要』第5号 秦野市桜土手古墳展示館
- 大島慎一・谷口 肇 1996「平塚市遠藤原遺跡出土の弥生土器について」『自然と文化』第19号 平塚市博物館
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1994『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ』同センター調査報告 21
- カラス山遺跡・堂山遺跡発掘調査団 1988『カラス山遺跡・堂山遺跡』
- 神澤勇一 1960「津久井町三ヶ木出土の弥生式土器」『神奈川県文化財調査報告』第26集 神奈川県教育委員会
- 国道412号線遺跡発掘調査団 1996『及川宮ノ西遺跡』
- 財団法人かながわ考古学財団 1997『宮畑遺跡(No.34) 矢頭遺跡(No.35) 大久保遺跡(No.36)』同財団調査報告 25
- 財団法人かながわ考古学財団 1999『池子遺跡群Ⅹ』同財団調査報告 46
- 昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科中屋敷発掘調査団 2008『中屋敷遺跡発掘調査報告書』同調査団 2010『中屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅱ 第7・8次調査』
- 杉原荘介・戸沢充則 1963「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』第2巻1号
- 杉山博久 1969「諏訪の前遺跡出土の晩期縄文式土器」『小田原考古学研究会会報』1
- 杉山博久 1971「神奈川県南足柄町上原遺跡調査概報」『小田原考古学研究会会報』3
- 杉山博久 1989「原始編」『南足柄市史 I』
- 谷口 肇 1990「堂山式土器」の再検討『神奈川考古』第26号
- 谷口 肇 1991「神奈川「宮ノ台」以前」『古代』第92号
- 谷口 肇 1991「津久井町中野大沢遺跡出土の条痕紋系土器について」『神奈川考古』第27号
- 谷口 肇 2007「三ヶ木式土器」について『津久井町史 資料編 考古・古代・中世』
- 秦野市教育委員会・玉川文化財研究所 2010『神奈川県秦野市平沢同明遺跡発掘調査報告書(2004-04 地点・2004-05 地点)』
- 秦野市教育委員会 2012『神奈川県秦野市堂坂遺跡 寺山遺跡 寺山金目原遺跡 平沢同明遺跡 9301 地点』

※ この時期を理解するための新書・単行本等

- 石川日出志 2010『農耕社会の成立』シリーズ日本古代史① 岩波新書
- 小林謙一 2019『縄文時代の実年代講座』同成社
- 小林青樹 2017『和人の祭祀考古学』新泉社
- 設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編 2009『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』同成社
- 設楽博己 2008『弥生再葬墓と社会』塙書房
- 設楽博己 2017『弥生文化形成論』塙書房
- 寺前直人 2017『文明に抗した弥生の人々』歴史文化ライブラリー449 吉川弘文館
- 浜田晋介 2018『弥生文化読本』六一書房
- 藤尾慎一郎 2011『〈新〉弥生時代』歴史文化ライブラリー329 吉川弘文館